



RUNNER

Vol.12

◆ 目 次 ◆

今日のRUNNER	
アナグマ	2
活動の現場	4
野生動物の獣医療	8



森田学校	10
救護したシジュウカラの記録	12
ボランティア雑感	
目が腫れたツバメ	15
インフォメーション	16



今日のRUNNER



第十二走者：アナグマ

ここでは保全センターに運び込まれた傷病鳥獣について保護記録やエピソードを交えてご紹介します。

妖怪？ムジナ

今回紹介する動物は、貉（ムジナ）とも言われているアナグマです。ムジナは、日本の民話では、タヌキやキツネのように人をばかす妖怪として描かれることが多く、古くからお馴染みの呼び方となっています。一見無関係のようで、実は同種であるという意味のことわざ「同じ穴のムジナ」も、アナグマの穴をタヌキが利用することがあるために生まれたとも言われています。また、実は狸汁の正体はタヌキではなく、アナグマだったとの説もあり、アナグマは昔から人々の身近な動物だったことが伺えます。



2009年5月27日 誤認保護された幼獣 (No. 090209)

受付番号	受付日	救護場所	性別	救護原因	転帰
110109	4/28	伊勢原市 日向	成獣 ♂	交通事故 疑い	死亡
110110	4/29	秦野市 羽根	成獣 ♀	交通事故	死亡
110111	4/29	伊勢原市 上粕屋	成獣 ♂	交通事故 疑い	死亡
110181	5/26	厚木市 中荻野	成獣 ♂	不明	死亡
110315	6/23	中井町 杉本	成獣 ♂	交通事故	死亡
110463	8/5	厚木市 毛利台	若成 獣♀	不明	放野
110498	8/24	相模原市 緑区	幼獣 ♂	疥癬	死亡
110519	9/5	厚木市 七沢	成獣 ♀	交通事故 疑い	死亡
110576	10/8	相模原市 緑区	成獣 ♀	不明	死亡
110640	12/7	伊勢原市 粟窪	成獣 ♂	不明	死亡

今年救護されたアナグマ

2011年に救護されたアナグマは、計10頭（12月9日現在）でした。特に異常が見られず、すぐ保護場所に戻された1頭を除き、すべてのアナグマが残念ながら死亡しました。このうち5頭は骨折や外傷、後肢麻痺などが見られ、原因として交通事故が疑われました。

タヌキで多い疥癬症は1頭のみで、同じ哺乳類でも救護原因に違いがあるようです。

分析

保全センターに救護されたアナグマにはどのような傾向があるのでしょうか。1983～2011年（12月9日現在）までの82頭の救護データを元に、様々な視点から分析していきます。

年別（図1）に見ると、年によって救護頭数に大きくばらつきがあります。しかし、年代別の平均救護頭数では、1980年代が1.6頭、1990年代が1.8頭、2000年代が4.1頭、2010年代が6.0

○図鑑○ NO.12

・ニホンアナグマ *Meles meles anakuma*

日本穴熊 Japanese badger

体は幅広でずんぐり頑丈。丘陵地から山地の笹藪や林に生息する。長い前足の爪を使って、トンネルを掘って生活する。夜行性、普通つがい生活する。肉食に適した頭骨にも関わらずミミズを主食とし、ネズミ、モグラの他にキノコ、果実も食べ雑食傾向が強い。里山では人家周辺のゴミ捨て場で残飯を漁り、パンやご飯も食べる。秋に皮下脂肪を蓄え11月頃巣穴で冬ごもりに入る。

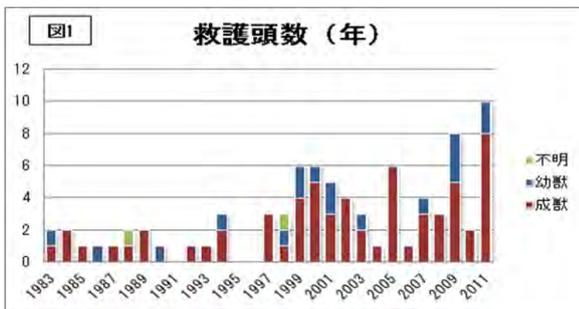
冬ごもりの終わる春に巣穴で子を産み育て、初夏の頃家族群が見られるようになる。妊娠期間は約3ヶ月で1産3~4子。寿命は約15年。体重4-12kg。

※参考文献

・小宮輝之(2002)：フィールドベスト図鑑 日本の哺乳類，学習研究社，東京。

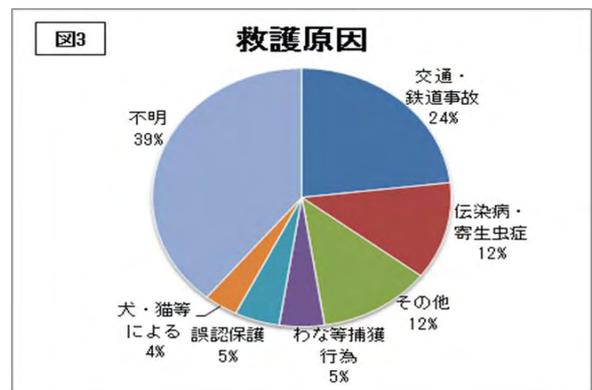
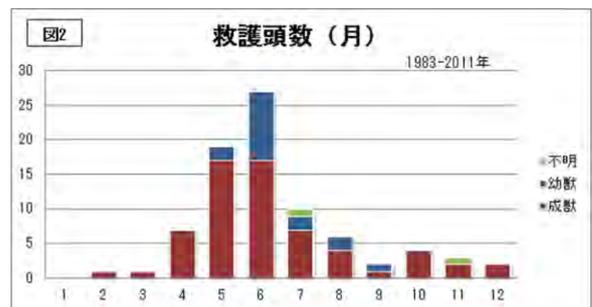
・鈴木 勤(1985)：決定版 生物大図鑑 動物，世界文化社，東京。

頭と増加傾向にあることが分かりました。近年における道路の増加、交通量の増加、都市化などがこの背景にあると考えられます。

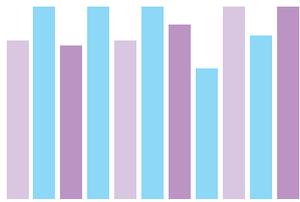


月別（図2）では、5、6月に救護されることが多く、この2ヶ月で全体の約57%を占めます。この時期は、子育てが始まったなどの理由でアナグマが活発に活動し、また幼獣も巣の周りを歩き回り、そのために人間と接触する機会が増えたのだと考えられます。対して冬ごもりしている時期は、救護頭数が少ない傾向があります。

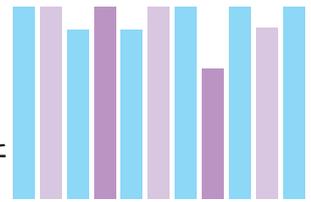
救護原因（図3）では、原因が分かっている中では交通・鉄道事故が一番多く、約24%でした。また不明でも交通事故が疑われることが多く、アナグマは交通事故が主な救護原因と思われます。



どこへでも車で出かける現在、野生動物の交通事故死を防ぐのは難しいかもしれませんが、しかし、身近に野生動物が暮らしていることを常に念頭におき、夜道に動物が飛び出すことがあるかもしれないと少しでも気にかけてみてください。



活動の現場



このコーナーでは普及啓発活動やイベントなどに参加したボランティアがその体験をもとにレポートしています。

初心者向け探鳥会

7月9日初心者向けの探鳥会を行いました。参加者は講師の加藤千晴先生を含めて10名。午前10時のスタート時にはすでに気温30度を越えているような暑い中での出発でした。

加藤先生による双眼鏡の使い方から始まった観察会は、保全センター周辺を巡りながら実施されました。日中の暑い時間帯での観察会なので実際に観察できた野鳥の種類は少なかったのですが、それぞれの種についての詳しい説明、例えば成鳥と幼鳥の違いや姿や色の特徴、鳴き声の聞き分け方、習性、季節による変化などにより参加者は興味深く感じたものと思います。

観察できたのは、イワツバメ・カルガモ・カワウ・カワラヒワ・キジバト・シジュウカラ・スズメ・ダイサギ・ツバメ・ドバト・ハクセキレイ・ハシボソガラス・ヒヨドリそれに鳴き声だけ確認できたのはコゲラ・メジロでした。



「野生を学ぶ」一日体験学習

7月28日10時から9名の子供たちと厚木中学校の先生お一人を加え、「野生を学ぶ」環境教育プログラムの一日体験学習が開催されました。

参加者は県内各地から集まり、上は小学校6年生から下は幼稚園児。3人で1グループずつに分かれて、傷病舎内を見学し、決められた担当箇所のお掃除を体験。餌配り、直接ツバメのヒナを手にとってのさし餌体験、ふれあい体験ではタヌキを触ったり、チョウゲンボウを手にとったりと楽しみました。

午後は、ムクドリとヒヨドリ合計9羽を子供たちが放鳥しました。その後レクチャールームに移動して、神奈川県の実生地図作りです。そして、保全センターの加藤先生から、保全センターに保護されてきている動物たちの様子などを聞き、最後は私達にも動物たちの為に出来る事がある事を知りました。

8月27日、夏休み最後の土曜日に2回目の「野生を学ぶ」体験学習が行われました。参加者は、11名。内容は7月と同じでしたが、スタッフの参加も多く、また2回目という事もあって少し余裕を持って臨めたように思います。ふれあい体験では、タヌキのプルプルに続いてコミミズクのハリーくんが登場しました。ハリーくん、ちょっと機嫌が悪かったけど、みんなの手の上に乗って愛嬌を振りまいていました。また、午前中は神奈川テレビの取材の方が子供たちの奮闘ぶりを撮影してくれました。

午後の放鳥は、キジバト2羽・ムクドリ4羽・ツバメ4羽で、なぜかツバメが人気者。みんな子供達の手の中から元気に飛びたって行きました。野生動物を取り巻く問題点の意見交換会では、熱心に取り組んでいる参加者の姿もありました。予定の3時には終了しましたが、お迎えにきたお父さんお母さんに今日の出来事を夢中に話しながら帰って行く様子に、少しでも子供たちの心に「何か」を残す事が出来たのではないかと思います。

今年2回開催した環境教育ですがより内容を充実させ、意味のある環境学習として今後も、春休み・夏休みと計画して行く予定です。興味のある方はぜひ参加してみてください。



野生動物救護ボランティア講習会修了式

9月25日、保全センターにおいて本年度の野生動物救護ボランティア修了式が行われました。受講課程を修了された53名の方々に保全センター野生生物課 木佐貫課長より「神奈川県野生動物救護ボランティア登録証」が、(社)神奈川県獣医師会副会長 西川先生とNPO法人野生動物救護の会の連名で「修了証」が一人一人に手渡され、来賓の方々、先輩ボランティア達の祝福の中、あらたな一步を踏み出しました。

修了式に続き、研修会として今年、世界遺産に登録された小笠原よりNPO法人小笠原自然文化研究所の佐々木哲郎理事をお招きし、「小笠原の自然の価値と保全」と題し特別講演をして頂きました。一般の方も含め、たくさんの方々にご来場頂き、補助椅子を用意するくらいの盛況ぶりでした。



(社)神奈川県獣医師会副会長
西川先生より修了証が手渡されました



佐々木哲郎理事による講演の様子

樹洞性哺乳類の調査&講習会

10月9日に保全センターにおいて、東京農業大学の安藤元一先生による樹洞性哺乳類の調査&講習会が開催されました。

まず、レクチャールームにて安藤先生からムササビに関する講義を受けました。パワーポイントや骨格標本を使っただけの講義はとても解りやすく、樹上性リス科と滑空性リス科の身体的特徴や運動能力の比較、生息樹林の特徴、樹洞の役割など興味深いものでした。

3班に分かれて保全センター野外施設での樹木調査開始。今回行った作業は次の通りです。

- ①マッピング作業…樹高10mを越える樹木について、地図上に樹種とレーザー距離計で計測した樹高を記録する。
- ②それらの樹木に樹洞があれば記録する。(高さ、直径、成因)
- ③大木の根元で糞探し

一旦集合し、班ごとに樹木調査報告をしました。その結果、今回の樹木調査では野外施設においては大きな木が少なかった事。ムササビの営巣に適する樹洞もほとんど見あたらなかった事がわかりました。しかしながらA班から「きれいな樹洞があった。」との報告がありました。

いよいよムササビ観察開始。まずは期待に胸を膨らませ懐中電灯片手にA班の見つけた樹洞へ全員で静かに移動。そして明かりを消し静かに待つ事暫し…。残念ながら、今回はこの樹洞からはムササビを確認する事はできませんでした。しかし、ほんとうにきれいな樹洞でしたので、きっと様々な生き物たちに利用されているのだらうと思いました。

その後各班に分かれて樹木調査をした場所を赤色ライトや懐中電灯で樹木を照らしながらムササビを探しました。残念ながら、ここでもムササビの姿を確認することはできませんでした。

再び集合し、各班から今回はムササビの姿は見られなかったものの、「鹿を見た。」「ムササビの目らしきものを見た」「ムササビの声を聞いた」との報告がありました。また、樹木に掛けられている巣箱のうち、巣材が入っている巣箱があるとの事。ムササビ生息の可能性に期待が持てる調査となりました。

最後に安藤先生から「調査の結果、生息していないことがわかったとしても、それは生息している所と比較対象してなぜ生息していないのかを研究していくことに繋がる。」というお話がありました。そうして得られた事が成果として役立つのだ。と改めて感じました。次回もし調査があるならばぜひまた参加してみたいと思いました。



*この講習会は丹沢の緑を育む集い実行委員会により「ボランティア団体活動助成事業」により開催しています。

放課後子ども教室

10月11日厚木市立相川小学校で「放課後子ども教室」が行われました。その事業の一つとして1回目に私達、当会が招かれました。この事業はコーディネーターの方が中心となり放課後、曜日別に様々な活動が行われるものです。救護の会では全2回のうちまず1回目は「コミミズク先生の野生動物についてのお話」と題して、子供たちにどんな種類の野生動物がいるかを知ってもらうプログラムを行いました。50人近くの子供達が参加しました。

殆どの子供達が本物のコミミズクを初めて見て、大騒ぎでした。「鳥のシルエットクイズ」では、殆どが正解で私達スタッフもビックリ!パワーポイントによる、「身近な動物の紹介」で全員がタヌキをアライグマと云ったときはこれもまた驚き!そして紙芝居。

学校の了解を得て相模川に隣接している学校の傍の堤防に行き、保全センターで保護されていたコサギを放鳥しました。子供達も大興奮のうちに、あっという間の1時間が過ぎました。先生たち、コーディネーターの方々にも喜んで頂き後日改めて感謝のお電話を頂いたほどでした。来年1月に2回目が予定されていますが、その時もより一層の動物たちへの深い理解と感動が得られるように有意義なプログラムを考えていきたいと思えます。



鳥のシルエットクイズ



コサギの放鳥

秋の各種イベント参加の報告

10月から11月にかけて、今年度は「傷ついた野生動物」をテーマにイベントに参加し、傷病鳥獣の現状を話し保護の必要性を伝えました。特にイベントに向け、野生動物が傷つく原因と予防対策をわかりやすく、親しみやすく表現したチラシを作成したことで、会場を訪れた人々に内容の濃い説明が出来たと思います。エデュケーションアニマルとしてはツツドリ(ルンバ)・メジロ(ジロー)・タヌキ(小太郎)の参加があり大変な活躍を見せてくれました。

参加したイベントは次の通りです。

★10月16日 動物フェスティバル 鎌倉海浜公園(由比ヶ浜)

心配された雨も朝のうちに上がり、会場では東日本大震災を教訓に、ペットの避難所模擬体験や災害救助犬のデモンストレーションなども行われ、犬猫などペット連れで訪れる方も多く大変な賑わいでした。当ブースの野生動物救護にも、沢山の方々に関心を寄せてくださり、展示パネルの説明にも力が入りました。

★10月22日・23日 ジャパンバードフェスティバル 我孫子市手賀沼親水公園

6年連続での参加出展となる当イベントですが、日本最大のバードフェスティバルだけあり、野鳥への関心も高く、来場者のみならず、各出展者との意見交換したり、他ブースの展示方法を参考にしたりと2日間に亘り、野生動物救護に関し沢山の方と話し合えました。

また鳥の博物館の見学や、手賀沼での野鳥観察など楽しめるイベントでもありました。

★10月30日 厚木環境フェア 厚木市中央公園

神奈川県獣医師会愛甲支部とのコラボで毎年参加出展する当イベントは、地球温暖化やゴミ処理など環境に関する様々な取り組みのブースが並び、今年は主催者発表では1万人が参加し、盛大に開催されました。太陽光発電システムのエコ製品の展示に加え、河川の水質検査、土壌汚染の問題なども取り上げられ、当会の野生動物救護活動も身近な自然環境として関心を持って説明を聞いてくださる方が多く居ました。

★11月3日 秦野市民祭り 秦野市中央運動公園

地元秦野市で毎年開催されるイベントで、子供から大人まで楽しめる催し物への出展ですが、野生動物救護活動を、わかりやすく説明することにより身近な問題として捉えてもらえればと思い参加しています。また初めての試みとして、パネル展示だけをブースから離し、近くの芝生の上、青空のもとで行いましたが、パネルだけを切り離しても、多くの方が傷病鳥獣の写真に関心を示してくれました。今後のパネル展示方法として検討してみるのも面白いと思えました。



第8回 野生動物保護セミナー in関東

11月5日に東京農業大学 厚木キャンパスにおいて「第8回 野生動物保護セミナー in関東」が5名の講師の方を招き行われました。今回は当会から渡辺理事長が講師として招かれています。

講義概要

- 東京農業大学の安藤先生「ニホンカワウソの絶滅と再導入の可能性」
絶滅した野生動物をとらして自然環境や野生動物の保護・保全のあり方を多方面の問題と絡み合わせた講義内容でした。
- 仙石原野生鳥獣クリニックの柏木先生「当クリニックにおける野生鳥獣の保護状況」
救護し治療した動物たちのことを写真と共に話して下さい、放野した時の充実感が伝わって来ました。
- 野生動物救護の会の渡辺理事長「傷ついた野生動物と向き合って」
後述します。
- 野毛山動物園の正木先生「動物園飼育係から野生動物保護に向けて」
動物園の役割と野生動物保護の実際、野生動物保護の普及啓発の現場としての役割などをわかりやすく説明した内容でした。
- 神奈川県獣医師会顧問の中山先生「私たちの周りを見るこわれた自然と野生動物たち」
野生動物にとって、いかに自然環境が大切かを熱く語る内容でした。

その中から安藤先生の講座を紹介したいと思います。

10月9日に当会が主催した「樹洞性哺乳類の調査&講習会」で講師をして下さった東京農業大学安藤元一先生のニホンカワウソの絶滅についての講義はとても興味深い内容でした。カワウソの新聞記事の掲載件数を人々の関心・関係と関連づけ、その時代的、社会的背景と合わせて日本のカワウソ保護を読み取り分析を行うというユニークな方法を紹介して下さいました。また、1800年代のヨーロッパにおいて、欧州各国が人為的にカワウソを繁殖させて再導入を試みた際、ドイツのみが自然環境の保全回復を重視することで自然個体群の回復を試みたという興味深い話もありました。カワウソ減少の根本的原因を解決するといういかにもドイツ的な合理主義が自然保護にも生かされていると言えるでしょう。

Twitterやfacebookなどソーシャルメディアが浸透した昨今、具体的な保全保護対策のみならずメディアが果たすことができる役割の大きさを示唆した安藤先生の今回の講座は聞き応えがありました。

救護の会 渡辺理事長の講座は「傷ついた野生動物と向き合って」と題し、当会の紹介や実際の救護活動の様子などの話でした。チョウゲンボウのリハビリの様子や実際の救護活動の様子など時折冗談を交えて聴衆を笑わせつつ、「一頭一羽でも多くの野生復帰を目指して」というスローガンを訴えました。講座後の質疑応答の多さからも学生たちが野生動物救護に高い関心を持っていることが窺われました。

このような野生動物救護関係のセミナーや研修会などへの参加は、より新たな考え方が発見できたり問題意識を持ち続ける糧ともなります。

当会ホームページでもセミナー、研修会のお知らせをしていますので、皆様も是非参加をしてみてください。



東京農業大学の安藤先生の講演



救護の会 渡辺理事長の講演

野生動物の獣医療

野生動物の救護活動において、獣医療は必要なものだというのはみなさん共通の考えだと思います。ただ、全ての傷病鳥獣に対して保護や治療が必要なのか、野生動物の治療はどこまで必要なのかということに関しては人それぞれ考え方が違うかもしれません。今回は私なりの野生動物の獣医療について考えてみました。

私は2年前に保全センターを退職し、現在は動物病院で仕事をしています。どちらも獣医師としての仕事ですが、野生動物と愛玩動物を相手にするのは勝手が違い、戸惑う事も多いです。今回は、野生動物と愛玩動物の獣医療を比較しながら、野生動物救護について考えてみたいと思います。

以前にRUNNER Vol.7にも書きましたが、野生動物の場合は人の活動の影響による自然環境下では起こりえないトラブルによる疾病などは救護の対象になりますが、自然環境下で起こったトラブルに対しては手助けするべきではないと考えています。しかし、愛玩動物の場合は基本的にほぼ全ての疾病は治療の対象になるでしょうし、病気にならないための予防処置も重要です。その違いは以下の点にあるのではないかと思います。

野生動物は生態系の中で食物連鎖を構成する生物なので、野生下で寿命を全うせず死ぬ事にも重要な意味があると思います。一方で愛玩動物は人にペットとして飼われるための動物であり、飼い主は動物の健康に気を使うのは当然でしょうし、そのためにできる事を積極的に行うことは大切な事でしょう。このような違いが野生動物と愛玩動物の対応の差になってくるのだと思います。



巣から落ちたため保護されたスズメの雛の写真です。

左脚と右翼の関節が脱臼していました。自然環境下で起きたトラブルであり、自然淘汰の一例ではないでしょうか。かわいそうかもしれませんが本来は保護すべきではない個体なのかもしれませんね。

では、実際に野生動物に治療等の処置をする際、愛玩動物と比べてどのような違いがあるのでしょうか。先ほども述べたとおり、愛玩動物においては、飼い主の同意があればほぼ全ての疾病が治療の対象になると思いますし、病気の予防も重要です。例えば、先天的・遺伝的な疾患を持っていても、治療することで長生きできる事もあります。進行性の病気の治療することで病気の進行を遅らせる事や、ワクチン接種や寄生虫の予防を定期的に行い、健康な生活をより長く送れるようにするのは重要な事です。また、去勢・避妊手術をする事で発情やそれに関する問題行動（動物にとっては当然の行動ですが人にとって都合の悪い行動の事です）を抑える事や、生殖器や性ホルモン関連の疾病の治療・予防は広く行われています。

一方で、野生動物に関しては先ほどのような例は治療の対象にはならない事が多いと思います。先天的・遺伝的な疾患を持つ動物は、生まれつきハンデキャップを負っているため自然淘汰される事が多く、積極的に治療して野生復帰させても野生下では生存できない個体がほとんどでしょうし、仮に長生きして繁殖したとしても、生まれてくる仔に遺伝病が引き継がれてしまえば生態系にとってはマイナスになるかもしれません。

希少種の保護という意味でワクチン接種等の予防処置をしている例はありますが、野生動物が感染症やその他の疾病で命を落とすというのは自然淘汰の一例でしょうし、生態系を保つ上で必要な事ではないかと考えられます。なので、たとえ未然に回避する方法がある疾病であっても、そうするべきではないケースもあると思います。

去勢・避妊手術は、数が増えすぎて被害が目立つ動物の個体数調整という意味では効果があるかもしれませんが、しかし、個体数調整が不要な種においては去勢・避妊手術をした個体は繁殖を行えないため、野生復帰してもその意義は半減してしまうのではないのでしょうか。なので、野生動物の保護・救護という観点から去勢・避妊手術を行う必要はありません。

これらの違いは、野生動物救護の目標はあくまでも野生復帰を目指すべきで、より良い生活を長く送らせる事が中心ではないという事からきていると思います。他にも例をあげればいくらでもありそうですが、今取り上げた点でも、野生動物と愛玩動物との違いが現れていると思います。

ここまで読むと、野生動物には獣医療は必要ないのでは？と感じる人もいるかもしれませんが、その感想はあながち間違いではないと思います。先ほどと繰り返になりますが、私は野生動物に対しては

自然環境下で起こったトラブルに対しては手助けするべきではないと考えています。たしかに、巢から落ちた雛や肉食動物に襲われて傷ついた動物をかわいそうと思う気持ちは理解できます。もし愛玩動物なら間違いなく治療するべきでしょう。しかし、その様な野生動物を助けることが良いことなのかは疑問を感じます。傷ついた動物を救護しなければ死んでしまう事も多いと思いますが、野生下で死んだ場合、他の動物の餌になり、または土に返る事で自然の中で循環するのが野生動物本来の姿ではないでしょうか。

では、実際にどのような場合に野生動物を治療するべきなのでしょう。自然環境下では起こりえないトラブルとはどんな事があるのでしょうか。例えば、交通事故、窓ガラスや電線等の人工物に衝突、水辺で釣針や釣糸を誤って飲み込んでしまった、などがあると思います。他にも色々な事があると思いますが、基本的には人の活動が影響して起こったトラブルは積極的に救護するべきだと思いますし、その様なトラブルを未然に防ぐ方法があれば積極的に取り組むべきだと思います。



釣り針、糸が絡まった状態で保護されたセグロカモメ。

この様な例は保護すべきでしょうね。



足に釣り針が刺さり外傷を負っていました。嘴にも糸が絡み口腔内にも外傷が見られました。針をはずし患部の洗浄や投薬治療を行いました。その後、この個体は野生復帰しました。



ネズミ捕り用粘着シートに掛かってしまった特別天然記念物のヤマネ。何とか助けてあげたかったのですが...

実際に被害が起きてからでは手を尽くしても難しいケースが多いです。

今回は、野生動物と愛玩動物の獣医療について比較しながら野生動物救護について私なりの意見をまとめてみました。読者の中には「野生動物に対する扱いが冷たい」と感じる方もいるかもしれません。見方によっては救える命を見捨てていると受け取れることもできるかもしれませんね。実際に保全センターで働いているときにも、一般の方が保護して搬送された動物を「保護しないほうが良いので元の場所に戻してほしい。」と伝え、「そんなかわいそうな事はできない、保護しないのはおかしい。」というようなお叱りを受けることもありました。理由を説明すると「保護すべきでない理由を頭では理解できるが、実際に行うのは気が引ける。」という方も少なからずいました。やはり、放っておくのはかわいそうと感じる方が多いのだと思います。しかし、それは本当にかわいそうな事なのでしょうか？私は決してそんなことはないと思います。なぜなら、弱肉強食の自然の中、自力で生きていくのが野生動物本来の姿であるからです。なので、野生動物を愛玩動物と同じではなく、しっかりと野生動物として接するのであれば、人間の手助けは必要最小限に留めるべきではないでしょうか。確かに、傷ついた野生動物に対して何もしなければ、死んでしまう可能性が高いかもしれません。しかし、野生動物の過剰な保護は自然の摂理に反する事になると思います。かわいそうと感じる事もあるかもしれませんが、場合によっては『野生動物だから保護しない』という事が最善の選択になる事もあると思いますし、それが野生動物の尊厳を守る事なのではないかと思っています。その分、保護が必要な野生動物に対しては精一杯の手を尽くしてあげたいですね。その結果、少しでも多くの個体が野生動物らしく生活してほしいと思っています。

森田学校とは、失われゆく自然と野生動物を守るために長年活動している獣医師・森田正治先生が、熱心に取り組んでいる野生動物レスキューや自然環境全体のことを学べるユニークな環境獣医学教育のセミナーです。今年の夏、このセミナーに参加し、貴重な体験をしてきた夏美さんのレポートをお伝えします。

森田学校では、夏の北海道で7泊8日をかけて野生動物や自然に関心のある学生たちへ、野生動物のレスキューを中心に、野生動物保護（傷病保護・希少種保護）の実際を体験したり、講義を受けて生命の尊さと自然の大切さを学んできました。

まずは毎朝の作業として、森田学校にいる動物たちの世話。オオハクチョウ、シカ、カモメ、フクロウ、トビのエサや水かえ。他にも動物小屋の糞出し作業をしたりもしました。これがかなりの量になっていて、臭い、重い、汚い、つらかった…。

講義では北海道での傷病鳥獣や、ヒグマやシマフクロウについての話を聞きました。ワシ・タカが密猟される理由や、鳥の体の基本的な構造など、普段学校では習わないような興味深い話を聞きました。

実習や施設研修では鳥の保定や強制給餌、採血など。標津サーモン科学館では博物館学芸員さんによる外での解剖学習、青空教室もありました。ちなみにこの日の夕食は回転寿司。北海道のサーモンは絶品！他には「オオカミの森」では実際にオオカミを見せてもらいながら講義、遠吠えがすごかった。



標津サーモン科学館

自然観察で一番印象に残ったのは野付半島ネイチャースクールです。トドワラ（トドマツの木が海水によって風化した枯木が倒れている）の遊歩道を歩きながら、先端まで行った。植物や鳥の種類がとても豊富！！風がまったくなく、海の波もまったくゆれず、空と海がきれいに鏡のようになって、とても感動！！野付半島ネイチャーセンターにある、ハマナスのソフトクリームは絶品！！



自炊をしながら1週間。お風呂屋さんで洗濯をしたら脱水まで時間がなく持ち帰り、「人力脱水」をしたら力を入れすぎ、服が裂けた人も…。ここには報告しきれない様々な活動で盛りだくさんな1週間でした。



フクロウの遺体を使っての実習



勉強中



終了式



皆でちゃんちゃん焼き



【セミナーを体験して】

最初は、不安も沢山ありましたが終わってみると普段体験が出来ない事ばかりでとても短く感じた1週間でした。講義や、実習などは、少しは経験のあったものの、北海道ならではのヒグマやシマフクロウの話や野付半島の自然や釧路の野生動物たち、とても勉強になりました。勉強以外にも一緒のクルーになった仲間達との出会い、先輩たちが帰る時や、私たちの帰る日は別れがとてもつらく感動しました。こんな経験は、めったにできないし、こんな生活もしたことのない中での同期の人たちの結束力はとても強いです。(笑) 住所はみんなバラバラですが、また絶対に集まろうとの約束もしたので、楽しみです。森田学校では野生動物のこと以外でも多くのことを学び得ることのできる場だと思っています。行ってよかったと心から思います。森田学校ありがとう！
(769 番卒業生)

【森田語録】

(セミナー中の先生の口癖)

- ・頭あ使えって言ってんだよ！
- ・ナビにたよりきっている！ ナビ人間！！
- ・背中は死角だ！
- ・言ってる意味分かりますか
- ・優先順位！
- ・考えれば分かるでしょ
- ・明日は我が身でございます
- ・森田の言うことを聞かないからそうなった

森田 正治先生

66 才 滋賀出身、酪農大卒、
森田動物病院長

別海町野付半島ネイチャーセンター長
東京/中央動物専門学校、仙台/アニマルインター
カレッジ、名古屋動物看護学院の講師

シジュウカラ救護の記録 —1羽だけの旅立ち—

2011年の夏に1羽のシジュウカラを救護した笠原さんによる記録です。

日時	事象、ヒナの様子	対応
<p>保護 (2011年6月30日 午前8時30分ごろ)</p>  <p style="text-align: center;">写真1</p>	<p>毎日見回っている雑木林の林道に1羽の赤裸ヒナを見つけた。大きな桐の落葉に包まれるようにして、チーチーと細い声で鳴いていた。(写真1)</p> <p>エサの種類を決定するため、種別の特定に係る。「野鳥をたすけるはじめの一步」身近な野鳥の救護・保護のためのハンドブックにより「握りこぶしより小さい／鶏卵よりも小さい／口の周りが黄色い／口の中は赤っぽい／背中に黒い線がある」ことより「スズメ」と予想。しかし確定ができないため保全センターの加藤先生にお尋ねしたところ、頭にポニョ毛が生えている／翼の一部に白いラインがある／体側に黄色ラインがある事柄が決め手となりシジュウカラと判明した。</p>	<p>すぐに救護せず周辺に巣の存在を確認し、親の姿を探した。1羽の赤裸ヒナの救護の場合、巣から落ちた事を運命と考え救護しない方法もある。</p> <p>10分ほど立ちすくんで救護の必要可否を思案する。救護する判断をしてからはすぐに保温に取り掛かった。空気穴を置けた菓子箱の中にシュレッター粉碎紙を敷き、45℃程の温水を入れた280mlペットボトル2本を周囲に置いた。</p> <p>体に外傷はなく、アリなどの昆虫も付いておらず、呼吸も大丈夫そうだったのでひとまず自宅で救護することにした。</p>
<p>1週目 (7月1～7日)</p>  <p style="text-align: center;">写真2</p>	<p>体長6.5cm(くちばしから尾羽)、翼4cm(大体広げた長さ)、足(ふしよから爪)2.5cm。</p> <p>エサの時間は午前7時～午後6時。それ以外は覆いを被せておく。自分から首を上げ口を開くのでタイミングが合えば先の細かいピンセットを使用し喉の奥まで餌を入れる事が出来た。上手く口を開けない時は強制給餌を行うがこの時はピンセットより割りばしの一方をナイフで削った特製のヘラが役に立った。4日目から水につけたミルワームをそのまま与えた。4日目の午後開眼し5日目には黒い羽が生え始めた。しっかりお尻を突き出しフンをするので取り除き、常に清潔を保つようにした。フンが水分を多く含み少々下痢気味になる(消化不良を懸念しエサの量を控える)。6日目には頭掻き／嘴で背中掻き／お尻に</p>	<p>救護直後はミルワームの内臓をしごき出し与えたほか、マイナーフード、ドックフードを水でスポンジ状にした。また市販のミルワームパウダーに水を加え、団子状又はイモムシ状にし、市販されている鳥用のビタミン剤も数滴混ぜて与えた。撤去したアシナガバチの巣から幼虫(長さ5mm)3匹、イエクモ、ジクモを各1匹与えた。喉にマイナーフードを詰まらせてしまったので急いで取り出し呼吸を確かめた。自分で順番に奥へ送り込むので、少しずつゆっくりと与える様にした。</p> <p>使われなくなった実際のシジュウカラの巣を利用し、保温と居住性の改善に努める(小さな籠に巣</p>

	<p>残ったフンを巣底へこすりつける／両翼をはばたかせる／左翼を後方へ伸ばし伸びをする、等の行動を取った。</p>	<p>を安定させ新聞紙のカバーを被せる)。 体重が計測器の不良で測れなかった事は大きな失敗。体重は常に計測する必要があると思った。</p>
<p>2週目 (7月8～15日)</p>  <p>写真3</p>  <p>写真4</p>	<p>泣き声がチーチーからキュキュキュと変わる。嘴をきれいにする(籠の周囲にこすりつける)動作が見られる。10日目に運動巣箱の枝から枝へ飛べるようになる。(向きは変えられない)巣を入れた籠の周りに飛び移るようになる。</p> <p>食が細くなり、1日の給餌で水につけたミルワーム3匹とマイナーフード3口程しか食べない。突然眠りに就く(写真4)。自分の足をつつく(ストレス?)。</p>	<p>強制給餌に必死になり、羽や足を押さえつけてしまった。羽が曲がった事がある。首にも注意が必要。</p> <p>徐々にピンセットから直接食べるようになった。さし餌移行。巣立ちを想定して運動用段ボールの中に巣籠を置く(写真3)。</p> <p>口を開けない時が多くなり強制給餌が頻繁になる。1時間半置きの給餌は続く。</p>
<p>3週目 (7月16～22日)</p>  <p>写真5</p>	<p>頭を取った生ミルワームを1回に4～5個、マイナーフード1粒を食べる(ビタミン剤数滴入り)。昆虫を与える場合は口のサイズに合わせた大きさをないと食べない時がある。20日目、さし餌によるミルワームを1回平均5匹食べる。他の物は食べない。右爪が伸びずに縮まった状態が長く続いた(原因は不明。後に伸びる)。</p> <p>私の声に反応し後を追う(野生での巣立ち状態同様。救護から17日目に巣立ちと考える)。動作が機敏になり左右に体を振る・波状に飛ぶ等の様子も見られた。ぐぜり(チュチュチュチーチーチュルチュルなど)1、2分鳴き続ける。</p>	<p>6畳ほどの部屋へ放し、飛ぶ練習をする。室内に洗濯ロープ(写真)を張ったり、天井(3m弱)まで届く観葉植物の周りに園芸用の支柱を巡らし、止まり木に見立てる(これをよく利用する)。</p> <p>1日に午前／午後の2回を室内練習とした。それ以外は運動段ボールに入れ、庭の水鉢の前に置き、野鳥の水浴びを観察させる。</p> <p>この頃から昆虫を取ってきて与えた(蛾／ショウリヨウバッタ／ハラビロカマキリ幼虫など)。</p>
<p>4週目 (7月23～30日)</p>	<p>体長11.5cm、体重16g</p> <p>頭のポニョ毛がなくなった。羽繕いも念入りになり、5-6分続く。部屋の隅から対角線に直線を飛ぶようになり、すぐ下へ降りず反転しながら留れる場所を探す。野外の同種を気にするようになった。また、オオタカに鋭く反応し、「ピー」と警戒音を発</p>	<p>自宅周辺で採取できる昆虫を与えた。牛の脂身を与えてみたところ、まあまあ食べた。</p> <p>植木鉢用の皿に水をため、手のひらで水浴びの真似をすると、すぐに皿に降り上手に水浴びをした(28日目)。</p>



写真 6

した。シジュウカラの特徴である「ジュー
ジュージュー」という鳴き声を発する
ようになった。

マイナーフードを全く食べなくなる。水皿
から初めて水を飲む。

5 週目

(8 月 1～7 日)



写真 7

ミルワームを自分でついでみ頭を取っ
て食べる。1 回に最高で 8 匹食べた。きな
粉を与えたらよく食べた。最初は外での水
浴びをしなかったが、慣れて来て行なうよ
うになった。私の周りから離れず、頭によく
止まる。寝る際は必ず片足、嘴を背中にま
わし保温する。庭のエサ台に来るスズメを
怖がらなくなった。飛んでいる虫をフライン
グキャッチして食べる。

林へ誘導したものの 3m 以上の
高度へは上昇しない。林内で 2 時
間ほど過ごさせた。外へミルワームを出し、それを食べながら午前
中自宅周辺で活動させ、午後は室
内へ戻した。週後半は 1 日中野外
で過ごした。この時期からよく木で
虫を探す。枝に止まっているときに
手を差し出すと羽でたたくしぐさを
した。

放野

(8 月 8 日)



写真 8

夕方になっても自宅周辺に戻らず、野
外でねぐらを取った。放野時の体重: 11g

この日を放野と判断。

2010 年に救護ボランティア登録を済ませたものの、何やかやとお手伝いが出来ないまま迎えた今年の夏。目の前で鳴き続ける赤裸ヒナに立ちつくしました。「1 羽である」「生まれたてである」「どうしたら育てられるのか」「巣から落ちたのはこの子の運命だ。もうしょうがない」「途中で死なせる事になりはしないか」などなど短時間で頭を巡らせたが「命を救いたい」が結局のところでした。すぐに研修資料を引っ張り出し、仕事そっち退けで取り掛かり幸いにも放野までに至った事はこのシジュウカラの持っていた生命力と、なんとか救いたいという思いからだったと思います。必死で生きようとする野生動物の命を繋ぐ事が、これほど充実した素晴らしい経験に成るとは想像しませんでした。こんな小さなシジュウカラにも野生動物としての威厳と気高さを感じ、そんな動物と接する事が出来た事は誇らしい喜びとなりました。何度となくご指導いただいた保全センターの加藤千晴先生、本当にありがとうございました。ホッと肩の荷が下りた感じですが、シジュウカラとの蜜月の日々を思い出すと、会えないのが切なくなるほどの夏の貴重な経験でした。



ボランティア雑感



保全センターのツバメとメジロの里親をしているボランティアの塩澤さん。
今回はそのうちの一羽のツバメについてのお話です。



＜目が腫れたツバメ＞

昨年11月頃から、今年2月頃まで、保全センターに4年間飼われていたツバメ1羽を、預らせていただきました。

風邪を引かせないように、温度には大変気を使いました。が、1ヶ月後に「クシュン、クシュン」とくしゃみをして、涙を流し、まるで風邪の症状。

温度を23度から25度に上げ保温に努め、餌にサプリメントを混ぜて様子を見ました。(事前に、保全センター獣医師の加藤先生に、与えても大丈夫かご相談をしまして、「大丈夫です」とのお返事をいただきました。)

約1週間後には、くしゃみ&涙も止まり、安心したのも束の間、今度は左目がなんとなく腫れた感じになり、また涙を流すようになりました。



注意してみると右目にも腫れが見られ、「これは大変！失明してしまうかもお～！」と思い、再び加藤先生へご相談。メールでツバメの写真と症状を伝え、加藤先生から即、「都合の良い日に、ツバメくんを連れて来て下さい」とお返事をいただきました。

しかし、保全センターへ連れて行くまでのわずかな間に症状が進み、下の写真のように酷くなってしまい、とても可哀相なことをしてしまいました。



保全センター獣医師の鶴飼先生に診察していただいたところ、抵抗力がなくなってきたり、目に汚れた物が入ったりすると、目が腫れやすくなるとのことでした。

目薬の点し方を指導していただきました。点眼液は1日6回(私は仕事上、6回点すことが出来ず、1日3～4回)を1週間続けるようにしました。(加藤先生、鶴飼先生、貴重な休憩時間中に有難うございました。)

目薬を点して5日後には症状が改善されたような感じがしたのですが、その後、残念ながら天に召されてしまいました。

我が家の一員になってから4ヵ月後のある朝のことでした。

現在、ツバメは2羽居ますが、これを教訓にし、病気にせず元気に過ごせるよう努力したいと思います。



インフォメーション



イベント

◆樹洞性鳥類の講座

▽日時 1/14(土) 10:00~15:00(予定)

▽場所 自然環境保全センター

☆小鳥たちが樹洞や巣箱をどのように使っているか観察してみませんか？

講師 日本鳥類保護連盟 藤井 幹 先生

環境教育

◆放課後子ども教室(1~6年生)

▽日時 1/20(金) 15:00~16:00

▽場所 厚木市立相川小学校

☆子どもたちに野生動物を学んでもらう楽しい教室です。スタッフ募集中、見学もOK!

お待ちしております。

年末年始の保全センターボランティアについて

◆自然環境保全センターの冬季休業

▽休業期間 2011/12/29(木)~2012/1/3(火)

☆この期間、センター職員は1人体制で午前中だけの出勤になり、動物たちの世話も手薄になりがちです。お忙しい時期とは思いますが、お時間のある方、是非お手伝いをお願いいたします!(*休業期間中はセンターへの電話/FAXも不通となりますので、ご注意ください)

衝突調査

◆秦野市立図書館衝突調査

▽日時 毎月最終金曜日 → 今後の調査日は 1/27、2/24、3/30

▽場所 秦野市立図書館

☆野生動物救護の会「バードストライク研究会」では窓ガラスへの野鳥の衝突調査を一緒に行ってくれる方を随時募集しています。興味のある方は事務局までご連絡を!

* 詳細は当会ホームページをご覧ください *

☆☆会員へのお誘い☆☆

当会は、ボランティアスタッフの協力と設営趣旨にご賛同いただきました皆様方の寄付によって運営されております。

私たちの活動を支えてくださる賛助会員も同時に募集しています。

★一般会員:どなたでもご参加いただけます(年会費 2,000 円)

★学生会員:学生の方(年会費 1,000 円)

★賛助会員:当会の活動にご賛同いただき寄付をしていただいた方

年会費:法人一口 5,000 円 個人一口 3,000 円 一口以上

【
振
込
先
】

ゆうちょ銀行振替口座 : 00270-0-47040

名義 : 特定非営利活動法人 野生動物救護の会

発行月:2011年12月 発行:特定非営利活動法人 野生動物救護の会 電話:0463-75-1830

〒259-1306 神奈川県秦野市戸川1086番地の4 ホームページ:<http://kanagawa-choju.sakura.ne.jp/>

編集者 表紙絵:齋藤誠 今日のRUNNER:小松美絵 活動の現場から:平沼亜矢子

野生動物の獣医療:福富潤 森田学校:渡辺夏美 シジュウカラ救護の記録:笠原逸子

ボランティア雑感:塩澤直美 インフォメーション:神崎さつき